

転倒後、機能低下を起こした入居者に対する 4DASを用いたアプローチ

◆キーワード

- 1 その人らしい生活
- 2 4DAS
- 3 認知症ケア

岡山県・玉野市

かぶしきがいしゃ あーる・けあ ぐるーぷほーむ

株式会社 アール・ケア グループホーム はるや

共同研究者名： 所長 原 広美
主任 立花 圭
理学療法士 野元 剛
事業部長 鈴木 茂和
ユニット職員一同

いのうえ ももこ

発表者：介護福祉士 井上 桃子

(株)アール・ケア グループホームはるや 平成 14 年
3 月に開設。平成 24 年 3 月施設老朽化による移設。
2 ユニット 18 名

理念【幸福に生き、幸福に暮らし、幸福な人生を…】

(取り組んだ課題・はじめに)

当施設では、入居者の高齢化に伴い、入退院を繰り返している入居者も多い状況が続いている。退院後 ADL の低下や意欲低下が顕著に表れ、入院前と同様の生活が送れず、認知症症状の進行や ADL や意欲低下をより一層進行させてしまう原因なのではないかと考える。ある入居者が、今までは話好きで、職員との会話も弾み、編み物も継続的に行っていたが、退院後は意欲低下・無表情の状態であった。入院前の状態に少しでも戻ってほしいと考えている時に【4DAS】の研修を受講することとなった。【4DAS】とは、Four Dimensional Assessment Sytem の頭文字をとったもので、身体機能・認知機能・生活機能・BPSD の 4 つの側面に基づき対象者を分類し、その対象者あったプログラムを提供する『認知症高齢者に対する効果的な機能訓練』として発表され、専門職種がいなくても、認知症への機能訓練の視点が簡便に整理出来、安全に提供できるよう開発されたプログラムであり、グループホーム入居者でも対象だと考え、【4DAS】を活用し、入院前のような意欲や活気のある生活に戻るよう働きかけを行った。

(倫理的配慮)

今回の論文や研究発表に際し、入居者、御家族には、写真掲載等についての十分な説明を行い、了承を得ている。

(具体的な取り組み)

90 歳 女性 要介護度 3

認知症日常生活自立度 M

自室にて転倒され、数時間後、顔面蒼白と冷や汗が見られたため、救急搬送。経過観察の為入院し、その後バルーンも留置。17 日後退院するも車椅子移動となり、食欲・意欲低下が顕著にみられる。退院当初、頻繁に尿意を訴えるが『付いてこないで欲しい』と言われることが再々となり、また『なぜ、以前ほど食べられなくなったのかな？』などの悲観的な発

言も多く、比して意欲低下、不活発となっていた。

まず、4DAS に取り組むために、身体機能評価と DASC-21 (地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート) 等を実施し、【4DAS フローチャート】を用いてタイプ分類を行い、A. 本人が興味のあること。B. 今の状況。C. 介入後の望ましい生活状況。D. 機能訓練方法を把握、検討し、日常的にできる運動(ラジオ体操・足、嚙下体操・笑いヨガ等)と家事動作(洗濯物たたみ・食器拭き・机拭き等)でプログラムを作成。ミーティングにて、社員全員に周知を図り、同じ視点を持って取り組めるようにした。平成 29 年 11 月 20 日より【4DAS】を開始。ユニット入居者全員で開始したが、入院前と退院後、取組後を比較検討したいため本対象者を選定した。また身体機能にどのような変化が起こるかを把握するため、2 週間に 1 回理学療法士による TUG・CS-30・FRT を計測し、さらに 1 か月に 1 回理学療法士とアセスメントを行い、プログラムを変更していった。

(活動の成果と評価)

開始して 1 か月後、CS-30・FRT の変化は見られなかったが、TUG の計測タイムは上昇し(27.3 秒→20.9 秒)、下肢筋力の向上が認められ、転倒リスクが軽減。その後 2 か月維持することが出来た。プログラムを対象者が好む運動(踏み台昇降・ボール投げ等)を取り入れることで、意欲が向上し、積極的に取り組めた。また他者と一緒に行うことでコミュニケーションが取れ、入院前と同様に会話の量も増加した。家事動作も、最初は無気力だったが 1 か月が経過した頃には、自主的に社員を呼び「何か仕事はあるかな？」と徐々に意欲的となり、入院前から好きだった編み物もするようになった。

今後の取り組みとしては、【4DAS】を活かし、入居者個人個人に合わせたプログラムを作成・実行し、身体機能維持・意欲向上に繋げていきたい。

(参考) 兵庫県 4DAS 認知症に対する機能訓練